

大 宮 市

深作稻荷台遺跡Ⅱ

県営大宮小深作団地関係埋蔵文化財発掘調査報告

—Ⅱ—

2001

埼玉県
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県では、「環境優先」「生活重視」「埼玉の新しくにづくり」を基本理念に、21世紀の豊かな彩の国を目指して、多彩なまちづくりを進めています。

大宮市、浦和市を中心とする県南地域では、首都機能を含めた高次都市機能の集積が図られ、さいたま新都心の整備が進められています。

一方、過密問題を解消し、安全で質の高い都市空間を再構築するため、公的住宅の供給など、住環境の整備が行われており、そのひとつとしてこのたび、県営大宮小深作団地の建設が行われることになりました。

県営大宮小深作団地建築予定地内には、埋蔵文化財の所在が確認されておりました。その取扱いについては、関係諸機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。当事業団では、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整に基づき、埼玉県の委託を受けて、発掘調査を実施いたしました。

今回報告いたします深作稲荷台遺跡の周辺は綾瀬川流域の台地上に多くの遺跡が分布する地域であります。

発掘調査の結果、縄文時代、近世の遺構が見つかり、長い年月の折々に先人の生活の舞台としてこの地が利用されたことがわかってまいりました。

また、各時代の遺物は地域の歴史を考える上で欠かせない資料と言えます。今回の調査では縄文時代の上器群が出土し、貴重な資料を得ることができました。

本書は、これらの成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及啓発の参考資料として、広く活用していただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただいた埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県住宅都市部住宅建設課、大宮市教育委員会、並びに地元関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成13年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 中野 健 一

例言

1. 本書は、埼玉県大宮市に所在する深作稲荷台遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番および発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

深作稲荷台遺跡(F K S K I N R D I)
大宮市深作西部特定土地区画整理86街区-13
平成12年11月1日付け教文第2-76号
3. 発掘調査は、県営大宮小深作団地建設事業にともなう事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第1章の組織により実施した。本事業のうち発掘調査については、鈴木敏昭・巖崎が担当し、平成12年10月2日から平成12年10月31日まで実施した。整理報告書作成事業は新屋雅明
5. 遺跡の基準点測量は株式会社東京航業研究所に委託した。
6. 発掘調査における写真撮影は鈴木・巖崎が行い、遺物写真撮影は入屋道則が行った。
7. 出上品の整理および図版の作成は新屋が行った。本書の執筆はI-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、他を新屋が行った。
8. 本書の編集は、新屋があたった。
9. 本書にかかる資料は平成13年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。
10. 本書の作成にあたり、大宮山教育委員会、山形洋一氏から御教示・御協力を賜った。記して謝意を表するものである。

凡例

1. 全体図等のX、Yによる座標表示は、国家標準直角座標第Ⅲ系に基づく座標値を示し、方位は全て座標北を表す。
2. グリッドは10×10m方眼を設定した。グリッドの名称は、方眼の北西隅の杭番号である。
3. 遺構の表記記号は次のとおりである。
SK=土壌 SD=溝 P=柱穴
4. 遺構の名称は原則として調査時のものを使用した。
5. 挿絵の縮尺は土壌1/60、溝1/120、柱穴1/60、遺物1/2・1/3である。

目次

序
例言
凡例
目次

I 発掘調査の概要	1	IV 遺構と遺物	10
1. 調査に至る経過	1	1. 縄文時代	10
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	(1) 土壌	10
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3	(2) 遺構外出土土器	13
II 遺跡の立地と環境	4	2. 近世	14
III 遺跡の概要	7	V まとめ	15

表目次

第1表 土壌 層	10
----------	----

挿図目次

第1図	埼玉県の地形図	4	第6図	土城(1)	11
第2図	周辺の遺跡	5	第7図	土城(2)	12
第3図	遺跡位置図	6	第8図	土城内出土遺物	12
第4図	遺構全体図	8	第9図	遺構外出土遺物	13
第5図	遺跡全体図	9	第10図	溝	14

図版目次

図版1	調査区全景(南から)	第90号土城	
	調査区全景(南東から)	図版6	第89・100号土城
図版2	第10・11号溝(東から)		第94・101号土城
	第10号溝(東から)	図版7	第95号土城
図版3	調査区西土城群(南から)		第105号土城
	調査区西土城群(北から)	図版8	土城内出土土器
図版4	調査区南東土城群(南から)		遺構外出土土偶
	第88・103・106・107号土城		遺構外出土石器
図版5	第88・103号土城		遺構外出土土器

I 発掘調査の概要

1. 調査に至る経過

埼玉県では「快適でうるおいのある生活空間の形成」を指して、すべての県民が安全で快適な生活を営むことができるよう、質の高い住まいの計画的な供給促進を図り、住環境の整備を行っている。

こうした施策の一環として、埼玉県では県営住宅を計画的に建設している。

埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課では、このような施策の推進と文化財の保護について、従前から関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

県営大宮小深作団地建設にかかる埋蔵文化財については、平成10年度に発掘調査が行われ、報告書も刊行されているが、取付け道路の工事計画変更に伴い拡張される範囲の埋蔵文化財の所在および取扱いについて、平成12年8月23日付け住建第161号で、埼玉県住宅都市部住宅建設課長から文化財保護課長あて照会があった。

文化財保護課では確認調査を実施し、その結果をもとに、平成12年9月21日付け教文第660号で、深作稲荷台遺跡の取扱いについて次のように回答した。

2 取扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は、現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状を変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づく文化庁長官あての発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

発掘調査については、実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と住宅建設課と文化財保護課の三者により調査方法、期間、経費などを中心に協議が行われた。その結果、平成12年10月2日から平成12年10月31日までの期間で、実施することになった。

文化財保護法第57条の3の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、第57条1項の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査に係る通知は以下のとおりである。

深作稲荷台遺跡 平成12年11月1日付け
教文第2-76号

1 埋蔵文化財の所在

(文化財保護課)

名称 (No.)	種別	時代	所在地
深作稲荷台遺跡 (12-229)	集落跡	縄文 古墳	大宮市深作西部 特定土地区画整 理86街区-13

2. 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

深作稲荷台遺跡の調査は、平成12年10月2日から平成12年10月31日まで行った。発掘調査面積は250㎡である。

当事業団では平成10年度に深作稲荷台遺跡の調査を実施している。遺跡の南端に沿った東西に細長い調査区について調査を行っており、緩やかな台地斜面部と急斜面部分からなっていた。

今回の調査区は平成10年度調査区の北西端に隣接する部分である。台地斜面部からやや平坦化する台地頂部にあたる。

深作稲荷台遺跡における発掘調査の実施経過は、以下のとおりである。

準備を経て、10月上旬には現場事務所のユニットハウスを設営、抜開作業、囲欄作業を行った。

中旬には表土掘削後、補助員による発掘調査の実作業を開始し、基準点測量を委託して実施した。

遺構精査を行ったところ、縄文時代の上層、近世の溝等を確認した。

順次、遺構覆土の掘り下げを行い、土層断面図の作成、遺物の取り上げを行った。それぞれの遺構の完掘後、写真撮影、平面図作成を行った。

10月下旬には遺構の写真撮影、平面図作成を終了し、発掘作業を終了した。

月末には器材搬出・現場事務所の撤去を行い、10月

末日をもって、深作稲荷台遺跡に関する作業をすべて終了した。

整理・報告書刊行

整理事業は、平成13年3月1日から平成13年3月23日まで実施した。

平成13年3月当初には遺物の水洗・注記と遺構図面の整理を開始した。

遺構・遺物の整理作業は3月上旬に順次行った。

遺物は、水洗・注記終了後、接合を行った。遺物には縄文時代の土器片、土偶、石器が認められた。これらの遺物については拓本・実測・トレース・版組み・遺物写真撮影などを行った。

遺物の作業と平行して、全体図、遺構図面の第2原図作成を行った。その後順次、全体図・遺構図のトレース・版組を行った。

こうした作業に平行してデータ処理、表作成、原稿執筆を行った。

また、遺構写真の整理・遺物写真の整理を行って、報告書に掲載する写真類の選択を行い、割り付け作業を行った。

これらの作業は3月中旬には終了し、原稿・割り付けの完成後、印刷の発注を行った。

3月下旬には記録類の整理収納を行うとともに、校正作業を行い、本書を刊行した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査 (平成12年度)

理 事 長 中野 健一
副 理 事 長 飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長 広木 卓

管理部

管 理 部 副 部 長 関野 栄一
主 席 (庶務担当) 阿部 正浩
主 席 (施設担当) 野中 廣幸
主 任 菊池 久
主 席 (経理担当) 江田 和美
主 任 長滝 美智子
主 任 福田 昭美
主 任 腰塚 雄二

調査部

調 査 部 長 高橋 一夫
調 査 副 部 長 石岡 憲雄
資 料 副 部 長 鈴木 敏昭
主席調査員(資料整理担当) 磯崎 一

(2) 整理作業 (平成12年度)

理 事 長 中野 健一
副 理 事 長 飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長 広木 卓

管理部

管 理 部 副 部 長 関野 栄一
主 席 (庶務担当) 阿部 正浩
主 席 (施設担当) 野中 廣幸
主 任 菊池 久
主 席 (経理担当) 江田 和美
主 任 長滝 美智子
主 任 福田 昭美
主 任 腰塚 雄二

調査部

調 査 部 長 高橋 一夫
資 料 副 部 長 鈴木 敏昭
主席調査員(資料整理担当) 磯崎 一
主 任 調 査 員 新屋 雅明

II 遺跡の立地と環境

深作稲荷台遺跡は大宮市の北東端、岩槻市との境界近くに所在する。東武東上線七里駅から北へ1kmの位置にある。遺跡の周辺は山林や畑地が多く残る場所であるが、区画整理事業や住宅建設により、年々市街化が進行している。

深作稲荷台遺跡の立地する大宮台地は埼玉県の東部を占めている。大宮台地は東を中川低地によって下総台地、西を荒川低地によって武蔵野台地と対峙する位置にある(第1図)。

大宮台地の中には荒川、綾瀬川、芝川、鴨川などの中小河川が台地を開析している。こうした中小河川によって分かれた支台のうち、東部に位置する大和田・片柳支台の東端に遺跡は位置する。大和田・片柳支台は西を芝川、東を綾瀬川に開析され、樹枝状に浸食谷が入り込んだ複雑な地形をなしている。

深作稲荷台遺跡の占める台地の縁部も支谷による浸食谷が発達している。東側には見沼代用水が流れ、南側には小支谷が入り込んでおり、遺跡は南東に向かって突きだした舌状台地上にある。台地頂部の標高は

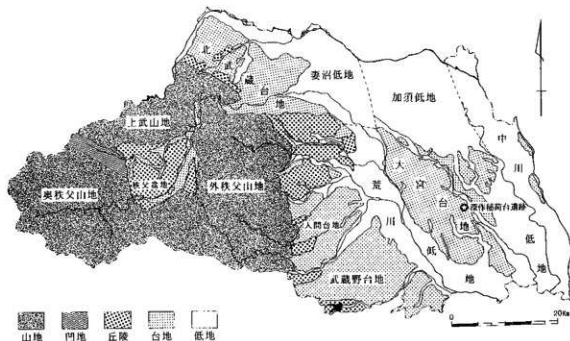
17m前後である。

見沼代用水を境にして深作地区は東部と西部に分かれる。遺跡の立地する西部地区は標高17m、東部地区は標高11m前後であり、約6mの比高差がある。さらに東部地区の東側には深作沼と呼ばれた標高8m前後の低湿地があり、遺跡周辺は高・中・低位の地形からなっている。

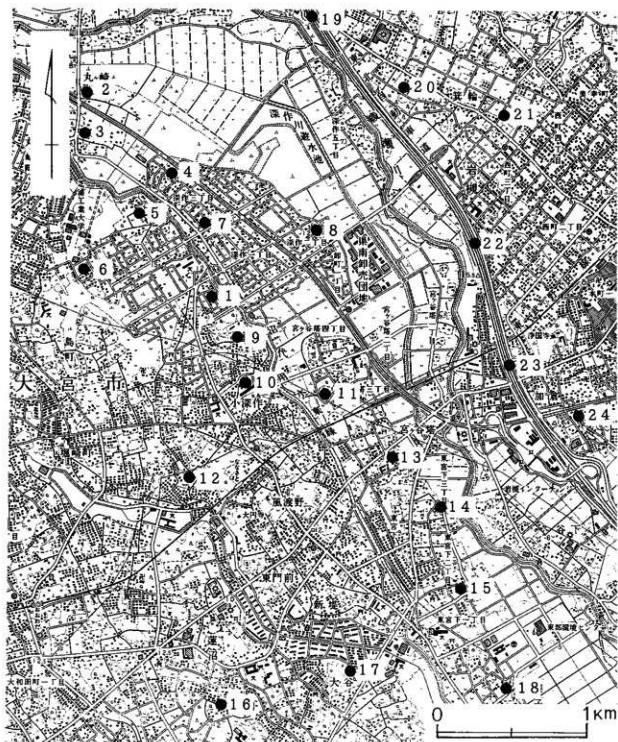
高位には¹遺跡の他、A-137号遺跡、A-230号遺跡、小深作前遺跡などが分布している(第2図5・9・10)。

A-137号遺跡では縄文時代中期末の住居跡が検出されている(田代他1994)。A-230号遺跡では中期末の住居跡・炉穴13基、縄文時代中期・古埴時代前期の住居跡が検出され、包含層からは縄文時代早期の燃糸文系土器群が出土している(立木・田代他1987)。小深作前遺跡では縄文時代中期の炉穴11基、縄文時代後期の土城12基、平安時代の住居跡が検出され、旧石器時代、縄文時代早期～後期の遺物が見つかった(立木他1983)。

第1図 埼玉県の地形図

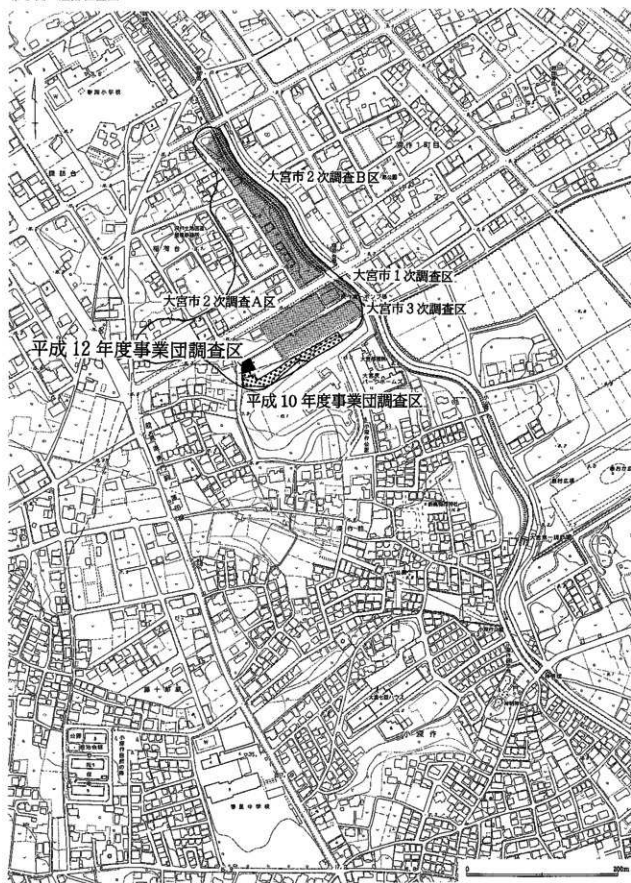


第2図 周辺の遺跡



- 1 深作稲荷台遺跡 2 A-146号遺跡 3 丸ヶ崎遺跡 4 貝崎貝塚 5 A-137号遺跡 6 稲荷原遺跡 7 深作東部遺跡群
 8 深作水田神社裏遺跡 9 A-230号遺跡 10 小深作前遺跡 11 宮ヶ谷塔遺跡群 12 小深作遺跡 13 上ノ宮遺跡
 14 A-116号遺跡 15 中里遺跡 16 A-83号遺跡 17 後遺跡 18 藤子八幡神社遺跡 19 平林寺遺跡 20 西原三遺跡
 21 箕輪貝塚 22 西原遺跡 23 加倉遺跡 24 加倉中島遺跡

第3図 遺跡位置図



中位面には只崎貝塚、深作東部遺跡群、深作氷川神社裏遺跡などが分布している(第2図4・7・8)。只崎貝塚は明治期より深作貝塚として呼称され、綾瀬川右岸に位置する最奥の貝塚として著名である。大宮市教育委員会による調査も行われ、住居跡・地点貝塚が明らかになっている(下村・庄野1978)。

深作東部遺跡群は13遺跡の総称であり、旧石器時代から平安時代に至る各時代の様相が明らかとなった調査事例である(立木他1984)。縄文時代前期の住居跡・囲山式の良好な資料をはじめ、縄文時代早～後期の遺構・遺物、弥生時代・平安時代の住居跡等が報告されている。また、深作氷川神社裏遺跡では縄文時代早期の竈穴、平安時代の住居跡が検出されている。

これまでにふれた深作稲荷台遺跡にごく近い遺跡群の周辺にも綾瀬川やその支谷に面した台地上に多くの遺跡が分布している。

第2図2・3のA-146号遺跡、丸ヶ崎遺跡は大宮市城北北に位置する遺跡である。A-146号遺跡では縄文時代早期の条痕文土器が出土している(立木・山形1985)。丸ヶ崎遺跡では縄文時代後期前葉の住居跡が発掘されている(下村・宮内1976)。

当遺跡の西には稲荷原遺跡(第2図6)がある。縄文時代早期の標糸文、沈線文、押型文土器などの良好な資料が出土し、稲荷原式が提唱されている(三友・安岡1966)。

Ⅲ 遺跡の概要

今回の調査は深作稲荷台遺跡の南部、250m²について実施したものである。

平成10年度の発掘区は遺跡の南の縁にあたり、緩やかな台地斜面部と急斜面部分からなっていた。今回の調査区は平成10年度調査区の北西端に隣接しており、台地斜面部からやや平坦化する台地頂部に相当している。標高16.6～16.8mのローム台地上である。

検出された遺構は縄文時代の土城2基、近世の溝2条、柱穴1本である(第4図)。

遺跡の南方に目を転じると、宮ヶ谷塔遺跡群、小深作遺跡、上ノ宮遺跡、A-116号遺跡、中里遺跡、A-83号遺跡、後遺跡、膝子八幡神社遺跡などが分布している(第2図11～18)。

宮ヶ谷塔遺跡群では縄文時代前期の地点貝塚8箇所、縄文時代前・中期・弥生～古墳時代・平安時代の住居跡が発掘されている(旧代・笹森他1985、立木・山形1985)。小深作遺跡では縄文時代晩期の住居跡や縄文後・晩期の土器・土製品など豊富な遺物が出土している(大宮市教育委員会1971、三田村1990)。上ノ宮遺跡は縄文時代早期の竈穴群や古墳時代前期の方形周溝墓が検出された(新屋・福田他1999)。A-116号遺跡では古墳の周溝が検出されている(笹森・田口他1986)。弥生時代～平安時代の住居跡が検出された中里遺跡(下村・宮崎1988)、弥生時代の遺跡として知られているA-83号遺跡、後遺跡、膝子八幡神社遺跡(立木・山口他1982)などがその南に分布する。

綾瀬川を挟んで対岸の岩槻文台には弥生時代中期の上城、古墳時代前期の住居跡等が検出された平林寺遺跡(埼玉県遺跡調査会1972)、縄文時代中期、弥生時代中・後期の集落が検出された西原遺跡(埼玉県遺跡調査会1972)、古墳時代の集落跡である西原三遺跡(小林・青木1993)、加倉遺跡(埼玉県遺跡調査会1972)、加倉中島遺跡(小林・青木1995)などが分布している(第2図19～24)。

縄文時代の土城は調査区の南東部、西部を中心に分布している。土城内からは縄文時代中期～晩期の土器片少数が出土している。

また、遺構外からも遺物の出土があった。縄文時代早期～晩期の土器片、石器、土偶などが出土した。

当遺跡の中央部から東側は大宮市教育委員会によって、3次にわたる調査が実施されている(第5図)。

先土器時代、縄文時代、弥生時代後期～古墳時代前期、平安時代の遺構・遺物が報告されている。

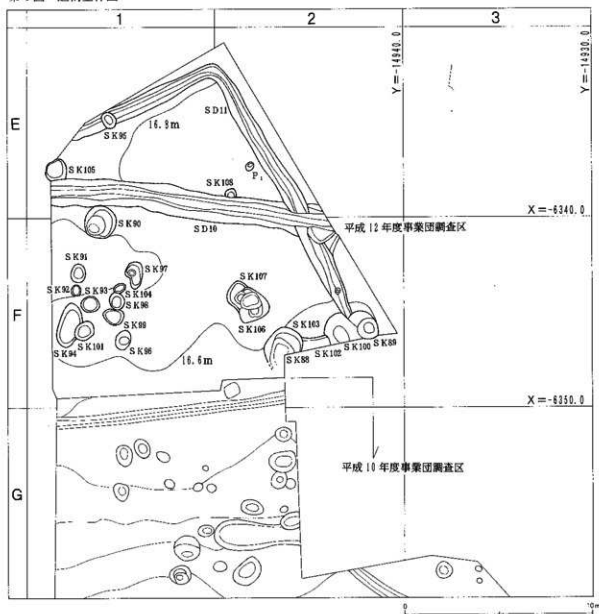
先上器時代の石器集中は第2次調査B区で3箇所、第3次調査C区で2箇所検出されている。

縄文時代早期の穴が54基検出されており、B区北側の東斜面、1次調査区から3次調査C区に至る台地先端部、2次調査A区の台地平坦部に集中して検出されている。住居跡は縄文時代前期～中期の10軒、弥生時代後期～古墳時代前期の15軒、平安時代の2軒が調査されている。

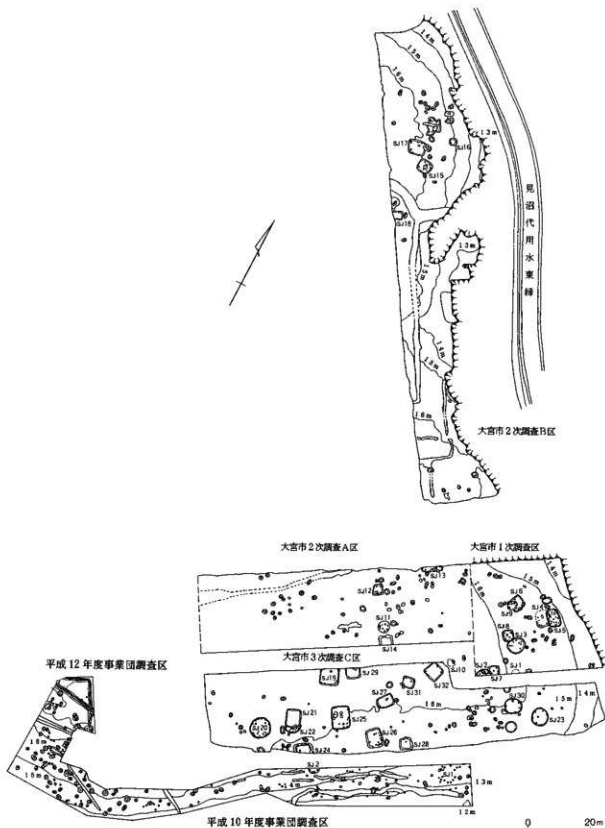
事業団による平成10年度の調査は集落の南斜面にあたり、縄文時代早期、縄文時代中期末から後期初頭、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭など集落の主要な時期と同様な傾向の出土遺物が見られた。

今回の調査は台地の頂部にあたるもの住居跡の検出はなく、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の遺物も認められなかった。縄文時代の遺物はこれまでの調査と時期的に同様な傾向を示すものと言えよう。

第4図 遺構全体図



第5図 遺構全体図



IV 遺構と遺物

1 縄文時代

(1) 土城 (第6図～第8図)

土城 (第6図～第7図)

21基が見つかった。調査区の南東部、西部を中心に分布する。規模・形状は多様であり、第1表に示した。

土城出土遺物 (第8図)

土城内からは縄文時代中期～晩期の土器片少数が出土している。第8図に示したとおりである。

第107号土城で中期末の土器が数点出土した以外はごく少数の出土遺物であり、時間的にも一定していない。ここでは土城群の時期を大きく縄文時代として捉えておく。なお、第90・97号土城は退化しうる破片がなかった。また、第92・93・95・98・102・103・105号土城からの出土遺物はなかった。

第8図1・2は中期末の浅鉢形土器の口縁部である。

1は横位に微隆帯が巡る。縄文は単節L.R。

3は晩期中葉、安行3c式の胴部破片である。沈線区画内に三角形の列点文を施す。

4は中期末の微隆帯を施した土器である。

5は中期末の土器であろう。単節R.L.の縄文を縦位

に施文する。

6は中期末の土器である。口縁部に沈線が巡る。

7は後期後葉の安行1式である。口辺部が外側して立ち上げる平口縁深鉢形土器である。単節R.L.による帯縄文を施す。

8は中期末の土器である。単純な形態の浅鉢形土器である。口縁部に微隆帯を巡らせ、微隆帯以下に単節L.R.の縄文を施す。

9は無文の口縁部である。晩期の土器であろう。

10は単節R.L.の縄文を横位に施文する。後期の土器であろう。

11は横線と縄文を施した中期末の土器である。

12は晩期の浅鉢形土器である。横線と刺突文を施す。大洞CⅡ式系統の土器である。

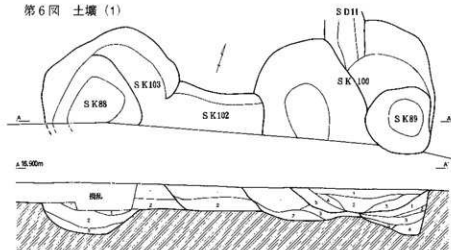
13～16は中期末の土器である。

13は口縁部が内湾知味に立ちあがる形態の土器で、円文と横線が巡る。単節L.R.の縄文を施す。14は単節L.R.を施した胴部破片である。15は底部である。16は横線と縄文を施す。

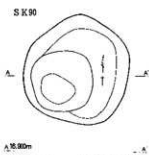
第1表 土城一覧

土城番号	挿図番号	グリッド	平面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	土軸方向	備考
SK88	第6図	F-2	不整形	(4.00)	-	0.50	-	
SK89	第6図	F-2	楕円形	3.60	3.30	0.68	N-0°-E	
SK90	第6図	F-1	楕円形	5.60	5.50	0.48	N-28°-E	
SK91	第6図	F-1	楕円形	3.20	2.50	0.16	N-0°-E	
SK92	第6図	F-1	楕円形	1.85	1.70	0.10	N-0°-E	
SK93	第6図	F-1	円形	3.10	-	0.18	-	
SK94	第6図	F-1	楕円形	7.90	3.95	0.58	N-13°-W	
SK95	第6図	E-1	不整形	3.10	2.25	0.76	N-38°-W	
SK96	第6図	F-1	楕円形	3.60	2.55	0.46	N-17°-E	
SK97	第6図	F-1	不整形	4.85	2.97	0.30	N-10°-W	
SK98	第7図	F-1	不整形	3.70	2.55	0.20	N-75°-W	
SK99	第7図	F-1	楕円形	2.80	2.55	0.24	N-4°-E	
SK100	第6図	F-2	不整形	9.28	-	0.56	-	
SK101	第6図	F-1	楕円形	3.50	3.05	0.75	N-66°-E	
SK102	第6図	F-2	不整形	(6.20)	-	0.36	-	
SK103	第6図	F-2	不整形	7.10	-	0.42	-	
SK104	第7図	F-1	楕円形	2.20	1.80	0.15	N-53°-E	
SK105	第7図	E-1	不整形	(3.60)	-	0.84	-	
SK106	第7図	F-2	不整形	(3.15)	-	0.16	-	
SK107	第7図	F-2	不整形	(5.95)	-	0.44	-	
SK108	第7図	E-2	不整形	(2.05)	-	0.19	-	

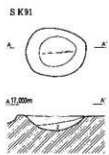
第6図 土壌 (1)



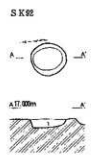
- SK 85
 1 暗褐色土 ローム殻, 灰砂質少量,
 2 暗褐色土 ロームブロック径2cm多量,
 3 暗褐色土 ロームブロック径1cm多量,
 SK 89
 1 暗褐色土 ローム殻径1~2cm多量,
 2 暗褐色土 ローム少量,
 3 暗褐色土 ロームブロック径1cm多量,
 4 暗褐色土 ローム殻径1~2cm多量,
 5 暗褐色土 中粒砂,
 SK 100
 1 暗褐色土 ロームブロック径1cm多量,
 2 暗褐色土 ローム殻径径1cm多量,
 3 暗褐色土 ローム殻径径1cm多量,
 SK 102
 1 暗褐色土 ローム殻径径1~2cm多量,
 2 暗褐色土 ロームブロック径1cm多量,
 SK 103
 1 暗褐色土 ローム殻径径1cm多量,
 2 暗褐色土 ローム殻径径1cm多量,
 SK 89
 1 暗褐色土 ローム殻径径1~2cm多量,
 2 暗褐色土 ロームブロック径1cm多量,
 3 暗褐色土 ローム殻径径1~2cm多量,
 4 暗褐色土 ローム殻径径2cm多量,
 5 暗褐色土 ローム少量.



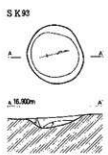
- SK 90
 1 暗褐色土 粘土状, 白色粒少量,
 2 暗褐色土 ローム少量,
 3 暗褐色土 ローム多量,
 4 暗褐色土 ローム殻径径1cm少量,
 5 暗褐色土 ロームブロック径1cm多量.



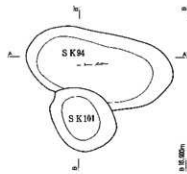
- SK 91
 1 暗褐色土 粘土状, 白色粒少量,
 2 暗褐色土 ローム殻径径1~2cm多量.



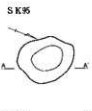
- SK 92
 1 暗褐色土 ロームブロック径3cm多量.



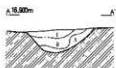
- SK 93
 1 暗褐色土 粘土状, 白色粒少量,
 2 暗褐色土 ローム殻径径1~2cm多量.



- SK 94
 1 暗褐色土 粘土状, 白色粒少量,
 2 暗褐色土 ローム殻径径1~2cm多量,
 3 暗褐色土 ローム殻径径1~2cm多量,
 4 暗褐色土 ロームブロック径2~3cm多量,
 5 暗褐色土 ロームブロック径1~4cm多量.



- SK 95
 1 暗褐色土,
 2 暗褐色土 ロームブロック径1cm少量,
 3 暗褐色土 ロームブロック径2~3cm多量,
 4 暗褐色土 ロームブロック径3cm少量.



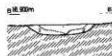
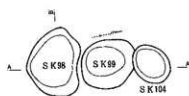
- SK 96
 1 暗褐色土,
 2 暗褐色土 ロームブロックを含む,
 3 暗褐色土 ローム多量を含む.



- SK 97
 1 暗褐色土,
 2 暗褐色土,
 3 暗褐色土 ローム殻, ブロック多く含む.



第7図 土壌 (2)



SK 98

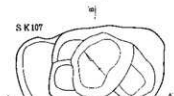
- 1 暗褐色土 ローム粒子を含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒下、ブロック多く含む。

SK 99

- 1 暗褐色土。
- 2 暗褐色土 ローム粒子を含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒下、ブロック多く含む。

SK 104

- 1 暗褐色土。
- 2 暗褐色土 Sよりローム粒下、ブロック多く含む。



SK 106

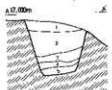
- 1 暗褐色土 ローム少量。
- 2 暗褐色土 ローム多量、ローム粒下層1~2cm多量。
- 3 暗褐色土 ローム少量。
- 4 暗褐色土 ロームブロック層1~2cm多量。
- 5 暗褐色土 ロームブロック層2~3cm多量。
- 6 暗褐色土 ローム粒下層1~2cm多量。
- 7 暗褐色土 ロームブロック層2~3cm多量。

SK 107

- 1 暗褐色土 ローム少量、炭化物多量。



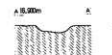
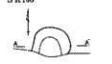
SK 106



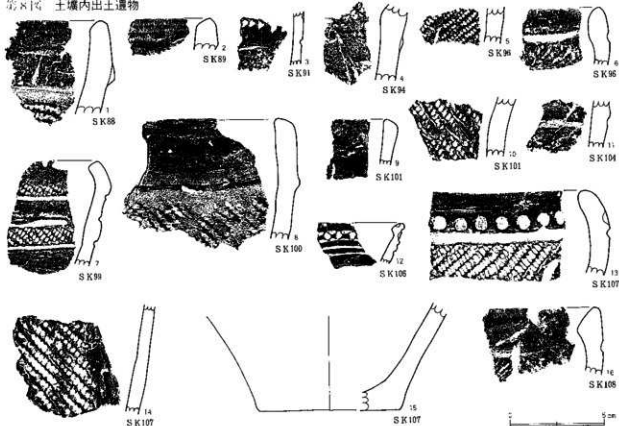
SK 105

- 1 暗褐色土 ローム粒下層1~5cm多量。
- 2 暗褐色土 ローム粒下層1~5cm。
- 3 暗褐色土 ロームブロック層1~5cm多量。
- 4 暗褐色土 ロームブロック層2cm多量。
- 5 暗褐色土 ローム粒下層1~5cm多量。
- 6 暗褐色土 ローム粒下層。

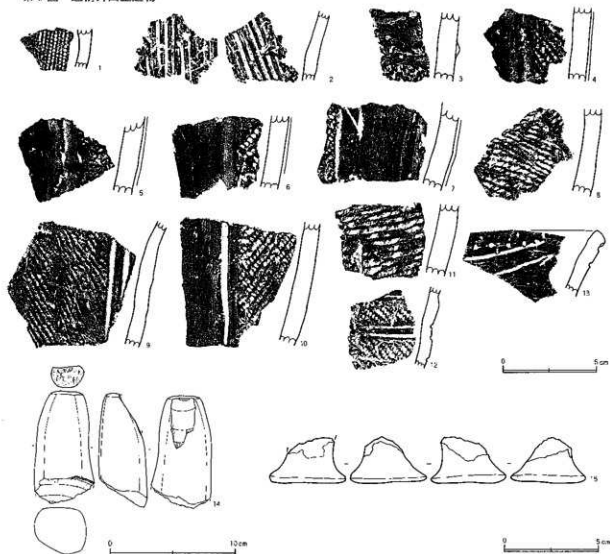
SK 108



第8図 土壌内出土遺物



第9図 遺構外出土遺物



(2) 遺構外出土遺物 (第9図)

1は早期前半の撚糸文系土器である。胴部の破片である。1.の撚糸を施す。

2は中期後半の条痕文系土器である。胎土中に纖維を含む。胴部の破片である。内外面に条痕を施す。

3~11は中期末~後期初頭の土器である。いずれも胴部の破片である。

3は横位の微隆帯を施す。縄文は単節である。4~7は縦位の微隆帯を施す。隆帯間に縄文を施す懸垂文の胴部破片である。いずれも単節の縄文を施す。9・10は北線内に縄文を施す。9は無節I、10は単節RLの縄文を施す。8・11は縄文を施した胴部破片であ

る。縄文は無節Iである。

12は後期後葉の安行1式である。帯縄文を施した深鉢形土器の胴部破片である。縄文は単節RIを横位に施文する。

13は晩期中葉の安行3c式である。浅鉢形土器と思われるL縁部の破片である。平口縁である。弧線文、小ぶりの列点文を施す。列点は丸い形をしている。

14は磨石である。基部には敲打痕が認められる。残存する長さ8.8cmである。幅4.8cm、厚さ4.0cm、砂岩製、245.0g。

15は上隅の胴部である。無文で装飾が無い。右胴部分と考えられる。残存する長さ24cmである。

2. 近世

溝2条と柱穴1本が検出された。第10図に平面図・断面図で示した。

第10号溝 (第10図)

E-1グリッドからE・F-2グリッドにかけて延びている。ほぼ東西方向に延びている。全長14.5mを調査した。

溝の幅は3m前後、深度は0.8m程度であった。

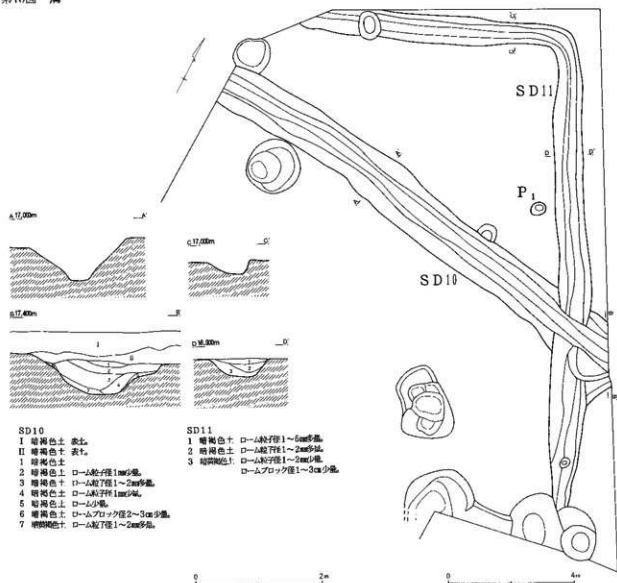
第11号溝 (第10図)

E-1とE-2グリッドの境で直角に屈曲し、F-2グリッドに延びている。南東部の縄文時代の土壌層土を切っていた。幅は2m前後、深度は0.3m。

第1号柱穴 (第10図)

E-2グリッドから見つかった (第10図P₁)。径0.43m、深度0.53m。出土遺物はなかった

第10図 溝



V まとめ

平成10年度の調査はローム面の標高が13mから16mに至る斜面部分であり、遺跡の南の縁に相当する部分であった。今回、本書で報告した平成12年度の調査区は平成10年度調査区の北西隅に隣接する部分であり、台地頂部に位置している。

今回の調査区では住居跡の検出はなかった。遺構が集中しているのは中位面への段差に面している遺跡の東側から台地の中央部分であることがより明瞭となった(第5図)。先土器時代の石器集中5箇所、縄文時代早期のガケ54基、縄文時代前期～中期の住居跡12軒、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡15軒、平安時代の住居跡2軒がこれまでに調査されている。

今回の調査区では土城内・遺構外から少量の縄文土器が見つかった。早期の条痕文系土器・条痕文系土器、中期末から後期前期の土器、後期後葉の安行1式、晩期中葉の安行3c式である。

条痕文系土器は大宮市の第2・3次調査区包含層でややまとまって出土しており、事業団平成10年度調査区においても数点が見つかった。

条痕文系土器の遺構は大宮市の調査区で伊穴54基が見つかり、事業団平成10年度調査区でも茅山下降式がややまとまって出土している。

深作稲荷台遺跡の周辺には条痕文系土器を出土する遺跡が数多く分布している。ガケが見つかった遺跡としてA-230号遺跡13基(立木・田代他1987)、小深作前遺跡11基(立木他1983)、宮ヶ谷塔貝塚6基(安岡他1982、立木・山形1985)、上ノ宮遺跡35基(新屋・菅田1999)などがあげられる。条痕文系土器が出土した遺跡として他に深作東部遺跡群(立木他1984)、A-146号遺跡(立木・山形1985)、膝了八幡神社遺跡(立木・山口1982)などがある。遺跡は数多いが土器形式の細別に照らすと知期間であり、継続性は低い。

縄文時代中期末から後期前期の住居跡が見ついている遺跡は周辺にA-137号遺跡(田代他1994)、深作東部遺跡群(立木他1984)、西原遺跡(埼玉県遺跡調査会1972)などがある。

後期後葉の安行1式はごく少数ではあるが事業団調査区から出土している。大宮市の調査区では第2・3次調査区の土城内や包含層からの出土があるものの、散見するのみで住居跡等の検出はない。

晩期の安行3c式は今回数点が見つかった(第8図3・9、第9図13)。列点文は単列に施される比較的古い様相の上器である。大洞C1式1点もこれと同時期の所産である(第8図12)。大宮市の調査区では出土していない。

安行式の遺跡としては周辺に小深作遺跡がある。昭和44～45年に大宮市教育委員会によって3次にわたる調査が実施されている。1次調査ではテラス状遺構、焼土跡、竪穴遺構などが検出され、60個体以上の完形土器、大形土器片が集中して出土しており、2次調査では晩期の住居跡が検出されている(大宮市1971)。また、3次調査でも土器、石器、土版、土偶、耳飾など安行期を中心とする豊富な出土遺物が出土している(田村1990)。

安行期の遺跡は大宮市域では東北原遺跡、弁能泥炭層遺跡などがある。先の早期とは対照的に数は少なく、継続性の高い遺跡が多い。

今回の出土遺物として、土偶の足と思われる土製品がある(第9図15)。安行3c式が散見されることから、この時期の可能性があるが、無文のため時期の限定は困難である。安行期に見られるミミズク形土偶、遮光器土偶の足ではない。先の小深作遺跡にも無文の中実土偶は認められる。安行期の所産としておきたい。

引用参考文献

- 新居雅明 1999 「深作稻荷台遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第253集
- 新居雅明 福田聖他 1999 「上ノ宮遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第252集
- 岩槻市史編さん室 1983 「岩槻市史」
- 大宮市教育委員会 1971 「小深作遺跡」大宮市文化財調査報告第3集 大宮市教育委員会
- 小林照教、青木文彦 1993 「岩槻市内遺跡発掘調査報告書」岩槻市教育委員会
- 小林照教、青木文彦 1995 「加倉中島遺跡発掘調査報告書」岩槻市遺跡調査会
- 笹森紀己子 1988 「龜山遺跡」『中里遺跡・龜山遺跡』大宮市遺跡調査会報告別冊4
- 笹森紀己子、小川岳人 1996 「二崎台遺跡—第3次調査—」大宮市遺跡調査会報告第56集
- 笹森紀己子、田門勝 1986 「B-13番遺跡 A-79番遺跡 A-239番遺跡 A-116番遺跡」大宮市遺跡調査会報告第15集
- 下村克彦、宮内正勝 1976 「丸ヶ崎遺跡発掘調査報告 本川参道並木調査報告」大宮市文化財調査報告第10集 大宮市教育委員会
- 下村克彦、庄野靖寿 1978 「貝崎貝塚第3次発掘調査報告」大宮市文化財調査報告第12集 大宮市教育委員会
- 下村克彦、宮崎由伸江 1988 「中里遺跡 龜山遺跡」大宮市遺跡調査会報告別冊4
- 埼玉県遺跡調査会 1972 「加倉 西原 馬込 平林寺」
- 田代 治、笹森紀己子 1985 「宮ヶ谷塔遺跡群発掘調査報告」大宮市文化財調査報告第18集
- 田代 治他 1994 「深作稻荷台遺跡—第2、3次調査—A-137号遺跡」大宮市遺跡調査会報告第44集
- 立木新一郎、山口康行 1982 「熊子八幡神社遺跡」大宮市遺跡調査会報告第4集
- 立木新一郎他 1983 「小深作前遺跡 青葉園東遺跡」大宮市遺跡調査会報告第7集
- 立木新一郎他 1984 「深作東部遺跡群」大宮市遺跡調査会報告第10集
- 立木新一郎、山形洋一 1985 「宮ヶ谷塔貝塚」大宮市遺跡調査会報告第13集
- 立木新一郎、山形洋一 1985 「A-77番遺跡 A-146番遺跡 B-2番遺跡 B-29番遺跡」大宮市遺跡調査会報告第14集
- 立木新一郎、田代治他 1987 「B-92号遺跡 A-230号遺跡 A-61号遺跡」大宮市遺跡調査会報告第20集
- 三田村美彦 1990 「小深作遺跡発掘調査報告第3次調査」大宮市文化財調査報告第28集 大宮市教育委員会
- 二友国五郎、安岡路洋 1962 「後遺跡」埼玉県立文化会館
- 二友国五郎、安岡路洋 1966 「稲荷原」大宮市教育委員会
- 安岡路洋他 1982 「宮ヶ谷塔第5貝塚」大宮市遺跡調査会
- 山形洋一他 1993 「深作稻荷台遺跡 東北原遺跡—第9次調査—」大宮市遺跡調査会報告第40集
- 埼玉県遺跡調査会 1972 「加倉 西原 馬込 平林寺」

写真図版



調査区全景（南から）



調査区全景（南東から）



第10・11号溝（東から）



第10号溝（東から）



調査区西土壇群 (南から)



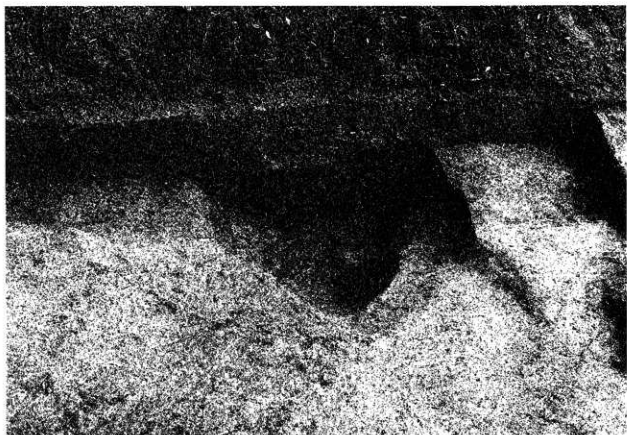
調査区西土壇群 (北から)



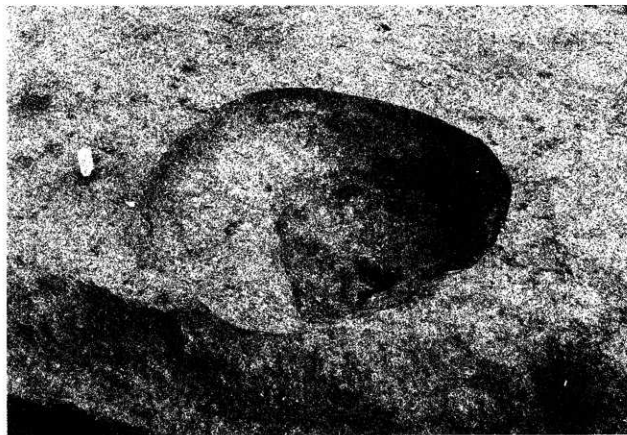
調査区南東土壌群 (南から)



第88・103・106・107号土壌



第88·103号土壤



第90号土壤



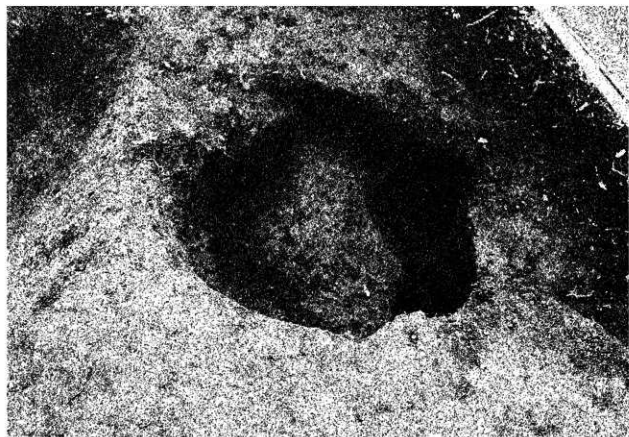
第89・100号土壤



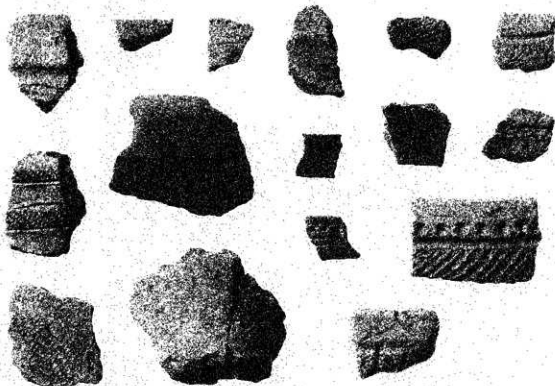
第94・101号土壤



第95号土壤



第105号土壤



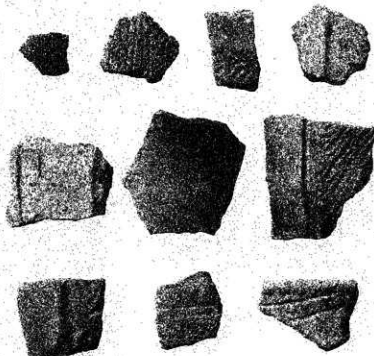
土壤内出土土器 (第8图)



遺構外出土土器 (第9图15)



遺構外出土土器 (第9图14)



遺構外出土土器 (第9图1~13)

報告書抄録

ふりがな	ふかどくいなりだいいせき							
書名	深作稲荷台遺跡Ⅱ							
副書名	県営大宮小深作団地関係埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	Ⅱ							
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第271集							
編著者名	新屋雅明							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県大里郡大甲村船木台4-4-1						TEL0493-39-3955	
発行年月日	西暦2001（平成13）年3月23日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〇 〇 〇	東経 〇 〇 〇	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふかどくいなりだいいせき 深作稲荷台 遺跡	さいたまけんおおくみや 埼玉県大宮市 ふかどくいなりだいいせき 深作西部特定 土地地区画整理 おおくみや 86街区-13	11205	229	35° 56' 34"	139° 40' 03"	20001002 ～ 20001031	250	県営団地 建設に伴 う事前調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
深作稲荷台 遺跡	集落跡	縄文時代 近世	土城21基 溝2条 柱穴1本	縄文土器 石器 土偶				

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第271集

大宮市

深作稻荷台遺跡Ⅱ

県営大宮小深作団地関係埋蔵文化財発掘調査報告

—Ⅱ—

平成13年3月16日印刷

平成13年3月23日発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里村船木台4丁目4番地1

電話 0493 (39) 3955

印刷／金井印刷工業株式会社